

2024 年度 第 4 回

駿台学力テスト

2 年

国 語

1 月 19 日（日）実施

〔 注 意 〕

1. まず初めに、この問題冊子が、あなたの受験する「学年」「教科」であることを必ず確認すること。
2. 解答は必ず解答用紙の指定された箇所に記入すること。解答に際して指定されない記号・符号を記入した答案は無効とする。
3. 問題は 1 ページから 19 ページまで。
4. 試験開始の合図があるまで、問題を開かないこと。合図があったら、問題に着手する前に必ず解答用紙に受験番号、氏名を忘れずに記入すること。
5. 試験時間は 60 分。
6. いったん書いた解答を訂正する場合は、前のものをしっかり消して書き直すこと。
7. 問題冊子は持ち帰り、『解答解説集』をよく読んで、復習に努めること。

※ 解答用紙の下部に QR コードシールを貼る欄があります。

【国語】の QR コードシールを間違わずに必ず貼ってください。

受験 番号								氏 名	
----------	--	--	--	--	--	--	--	--------	--



駿台中学生テストセンター主催



2024S24030

〔注意〕

※ 解答はすべて解答用紙に記入すること。

※ 特にことわった場合をのぞいて、解答の字数指定では「、」「や」「。」「その他記号も一字に数えます。

一

次の――線のカタカナは漢字に直して書き、漢字はその読みをひらがなで書きなさい。

- (1) ウイルスが体内にシンニユウする。
- (2) 都会の人ごみをキヒして田舎に住む。
- (3) ソツキョウで曲を作るなんて素晴らしい才能だ。
- (4) チセツな絵を描く。
- (5) 未曾有のできごとだ。
- (6) 平衡感覚がないと、じっと立ってられない。
- (7) 今日は穏やかな日和だ。
- (8) 山あいにある閑寂の温泉地を楽しむ。

〔二〕 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

寝ついてから三日目に、少年は低い声で尋ねた。何時いつになったら梅干うめぼし食べていいの？ 何の味もない食事の世話をし
てやっていた母親は、さりげなく、少年の顔を見ないようにして答えた。そうね、あと十日。少年は黙うなずつて頷うなずいて、
ぼんやりと定まらぬ、ほのぐらい瞳で天井の木目を眺めた。

幼い頃からひよわなこの少年は、病②氣に親しみを抱いていた。稻妻型に上下する体温表の赤線を、沁しみるよう
な氷ひょうのう嚢のうの感触を、枕元の葉びんに沈しまつている、うす黄いろい透明な液体の色を好んでいた。熱っぽいけだるさや、し
くしくと痛む身体や、病室の特有な湿っぽい臭いなどをさえ愛しもした。それから食物。病氣になると、どうして平素
はつまらない梅干が、あんなにも鮮やかに目に映るのだろう。少年は、真白な薄かい粥かゆのうえに、大粒の梅干をそつと載
せて、悲しいほどの鮮紅色が周囲に滲にじんでゆくのを見るたびにこう考えた。熱さえ出せば、この不思議な、僕ひとり
しか分からない、病氣の持つ秘密に接することができる。それなのに、今度の病氣は重そうなのに、両親や医者の子
から見てもただの風邪かぜなんかじゃないのに、なぜ梅干を食べてはいけないんだろう。少年は、病氣といえば梅干を食べ
るものと考えていた。梅干の、真赤な色が見られないのが、せい一杯顔をしかめさせる酸すい味に親しめないのが寂し
かった。――少年は急性*2の腎炎*2を病んでいたのである。刺戟物しげきや蛋白質たんぱくを摂とらしてはいけなと、医者は両親に告げた。
その医者は、なぜかクリーム*1の匂いがぶんぶんした。そして、とても海豹あざらしに似た顔立ちをしていた。

十日すぎても梅干は食べられなかった。十日どころか、半月一箇月とたつても、食事は相かわらず塩氣のないものば
かりだった。腎臓病のために無塩醬油しょうゆというものがあつたが、奇妙な薬品の味がするばかりなのである。しかし少年は、
口に出して不平も言わず、味のない食事を摂つては大人しく床についていた。時間が、恐ろしく單純に、平らかに、退
屈に過ぎて行つた。何の変化もない日々だった。痛みもなかった。熱もなかった。少年は何回も天井の木目を数え、障
子にさす日ざしの移るのを眺めていた。そして酸い梅干の味にこがれ、それにも諦めを抱くと、今度はきらびやかな色
彩にあこがれた。元氣だった夏、学校の宿題として集めた昆虫たちがその対象となつた。黒い大きな鳳蝶あげはちょうもあつた。

瑠璃色の小灰蝶もあつた。紅色の下翅を持った天蛾もあつた。病氣が、少年の心をふかく沈ませ、^③なぜかあの翅の形が、鱗粉のきらめきが、この世のものならず美しく思いだされた。すぐと母親に頼んで、押入れから標本箱を出してもらった。床に仰向いたまま、両手に箱を持つて、冷たい硝子蓋のなかを覗きこんだ。少年はがっかりした。とても大きな失望だったのである。蝶も蛾も甲虫も、みじめに黴につつまれて、そのうえ虫に喰われていた。触角が折れ、翅が歪んでいた。これはひどい。防虫剤を入れてなかったのだ。少年は顔をしかめて考えた。ぜひ新しく採集して、きれいな標本をこしらえなくちゃあ。そして、また思った。今は冬だつけ。まだ十二月だつけ。それに、僕はまだ起きられないのだったな……。少年は瞳をかすませて天井を見あげた。そこには、もう暗記している木目が、^A陳腐な模様を形造っていた。――

ある日、少年は嬉しかった。尿の蛋白が大変減ったから、白身の魚を食べてもいいと、口ひげのなかから医者が言ったのである。少しは床のうえに起きあがってもいいのだった。そのうえ、父親がきれいな本を買ってきてくれた。昆虫図譜。〈中略〉

繰り返し繰り返し、少年は昆虫図譜を見た。どの頁もほとんど空で覚えてしまうほど眺めたのである。――このとびぬけて雄大な甲虫は「テナガゴガネ」というのだ。産地は台湾。だからちよつと捕まえにゆくと訳にはゆかない。このフェアリーを思わせる蝶は「アサギマダラ」だ。これは内地にもいる。なんて美しい蝶だろう。こんな蝶が採集できたら、嬉しさのあまり、吃逆がでて止まらなくなるかも知れない……。しかし少年は蝶よりも蛾のほうが好きになっていた。病氣が、その心をしめやかに翳らしていたからである。蛾のほうが、より湿っぽく、より深く、より底^Bが知れなかった。そういう点がかえって少年を惹きつけた。昆虫図譜の末尾には、附録として昆虫採集法が載っていた。燈火採集法というのがある。森林のなかに、白い布を張りめぐらして、煌々とアセチレン燈をとますのだ。何百という蛾が集まってきて、白布にとまったり、燈のまわりを乱舞するのだ。僕はそこで捕虫網をふりまわす。蛾の群れがさつ

と散る。眩しく翅粉が光に映え、見る見る毒壺は美しい蛾で一杯になる……。そんなことを考えるとき、少年の瞳はどこか遠くを見つめながら、へんに熱っぽく輝いた。

〈中略〉

……あたり一面、ぼやつと霞んでいた。これは霧であろうか。少年はうつうつとあたりを見まわした。苔に幹をつつまれた老木が、闇のなかに立ちはだかっていた。いつの間にか、少年は森の中にいたのである。しつとりと曇った夜だった。どうしてこんな森のなかに迷いこんできたのだろう。ふと気づくと、目の前に大きな白布が張られてある。燈火採集に使う白布であった。少年の鼓動は高まった。アセチレン燈は？ やはり準備されていた。白布の前にちゃんと火をつけるばかりになって置かれてあった。ためらわず、少年はアセチレン燈に点火した。白昼よりも眩ゆく、光輝が闇闇めがけてとび散って行った。古びた樹木の肌が、曲がりくねった枝が、物怪のように闇のなかから浮かびあがった。おびえたように少年は、長いあいだそこに坐っていた。これから、何が起こるのだろうか？ ……突然、底ごもりした羽音が聞こえ、黒い影が光を横ぎり、狂おしく旋回し、ゆらゆらと白布がゆれた。なにか分からぬ蛾が白布にとまったのである。少年はびくつと瞳を凝らした。胸ははげしく動悸した。ああ、やっぱり本当だった。一匹の、胴の太く翅のどがった、大きな素晴らしい蛾が、すぐ目の前に、輝いている白布のうえに、じつととまっているのが見えた。静かに、静かに！ 少年は息を殺した。なんとという蛾だろうか？ 少年は知っていた。“ギイロスズメ”。昆虫図譜の第二二図版に載っていたのである。あざやかな緑の線が背中を走っていて、腹部はなまめかしい黄色なのだ。あのにぶく燦んだ複眼はどうだろう。きつと僕の様子を覗っているのにちがいない。静かに、静かに！ さて、どうしたものだろう。捕虫網を取りだそうか。それとも毒壺で伏せようか。そのとき、もうひとつの美しい蛾が、アセチレン燈の周囲をひらひら舞いはじめた。〈中略〉——こうして、とめどない酩酊が、めくるめく耽溺が、少年の周囲に展かれて行った。少年は、おののいて、捕らわれて、金縛りに会ったように凝視した。気を失いそうになりながらも見とれつくした。病気が、少

年の瞳を、ひろく大きく奥ぶかく澄ませ、透視の力を与えていた。柔らかな心のなかを、眩ゆい翅粉が、摩り、流れ、まさぐり、どこまでもどこまでも沈んで行つた。そしてぐつたりと喘ぎながらも、少年の瞳は一切の奥底を見てとつたのである。——夜蛾の群れが、不意に波立ちはじめた。ひとしきり激しく、翅紋が渦を巻いた。少年をつつみこんで、光と色彩とが砕け散つた。少年の瞳が閉ざされた。がつくりと首がたれた。段々と気が遠くなつて行つて、無数の夜蛾の群れがなおも狂おしく羽ばたいているのが、ただぼんやりと感じられた。僕は死んでゆくのだな。ここに集まつてきた蛾たちと一緒に。少年は消えてゆく意識のなかでわずかにそう考えた。——

……少年は我に帰つた。夢だったのかしら？ たしかに、まだ冬だった。窓の外を粉雪がちらついているのが見えたから。天井には相変わらず見慣れた木目がくすんでいた。——眼が覚めたの。ずいぶんうなされていましたよ。尿をとりにきた母親の声がきこえた。もう熱は下がったようね。額に手をおかれて、少年は甘えるように熱に疲れた顔をしかめた。僕、なんともないよ。母親のいたわるような優しさが恥ずかしかった。不意に、まったく急に、^④ひとつの願望が満たされたためだろうか、忘れていたもうひとつの願望が襲つてきた。母親の顔をまつすぐに見て、おかしいほど勢いこんで尋ねた。何時になつたら梅干食べられる？ そうね、あと十日。ふつと答えてしまった母親は、すぐに失敗^{しま}つたと思つた。^⑤少年もやはり後悔していた。仕方なしに、今日はお医者さまがくる日だね？ と白くれた。そして、あのクリームの匂いのお医者さまが、なにか新しい食物を許してくれるといいなと考えた。それからまたこうも思つた。どうしてあのお医者さまは、ああも海豹に似てるんだろうな。

〔注〕

* 1 氷嚢……氷を入れた袋。

* 2 腎炎……腎臓に起こる炎症。尿に蛋白がたまり、むくんで血圧が高くなる。血圧が高いときは塩分を控える。

* 3 フェアリー……妖精。

* 4 煌々と……まぶしいくらい輝く様子。

(北杜夫「百蛾譜」による)

*5 物怪……幽霊。妖怪。

*6 酩酊……ひどく酔うこと。ここでは、気分が高ぶって我を忘れたような状態になること。

*7 耽溺……不健全なことにふけること。

問一——線①「少年の顔を見ないようにして答えた」とありますが、それはなぜですか。その説明として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 少年に梅干を食べさせることができない自分に嫌気がさしてきたから。

イ 味がしない食事が続いている少年に申し訳ないと思ったから。

ウ 顔をあわせるといつも同じ質問をされるのが少しうつとうしかったから。

エ 気をつけて世話をするように夫からきびしく言われていたから。

オ 病気が長引きそうだということを少年に悟られたくなかったから。

問二——線②「病気に親しみを抱いていた」とありますが、これはどのような気持ちを表したのですか。〈親しみを抱く理由〉とともに三十字以上四十字以内で説明しなさい。

問三——線③「なぜかあの翅の形が、鱗粉のきらめきが、この世のものならず美しく思いだされた」とありますが、このときの少年の気持ちを説明したものととして最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 元気だった頃のことを思いだして少しでも早く病気が治ってほしいと祈る気持ち。

イ ただ寝ているだけの退屈な毎日に飽き飽きしてしまって、少しでも新鮮な刺激を望んでいる気持ち。

ウ 病気のために心がすっかり沈んでしまって、かえってはなやかで明るいものにあこがれる気持ち。

エ 病気がもうすぐ治ると信じて今からそのときに何をしようかとあれこれ考え楽しくなる気持ち。

オ 食事に対して不平も言わず大人のいうとおりになっているものの心の中では反発を感じる気持ち。

問四 ――線A「陳腐な」・B「底が知れなかった」の意味として最も適切なものをあとからそれぞれ一つずつ選び、記号

で答えなさい。

A 陳腐な

ア 見た目にきたならしい様子

イ ありふれてつまらない様子

ウ 形がくずれている様子

エ 思いもよらぬ風変わりな様子

オ とらえどころがなく不気味な様子

B 底が知れなかった

ア なんとなく恐ろしかった

イ 消えてしまいそうで頼りなかった

ウ 様子が異なっていた

エ 見当がつかなかった

オ 希望が見えなかった

問五 ――線④「ひとつの願望が満たされた」とありますが、それはどういうことですか。十五字以上二十五字以内で説

明しなさい。

問六 ――線⑤「少年もやはり後悔していた」とありますが、それはなぜですか。十五字以上二十五字以内で説明しなさい。

問七 この小説の作者北杜夫の父親は、齋藤茂吉さいとうもきちという歌人です。齋藤茂吉についての説明として最も適切なものを次

から一つ選び、記号で答えなさい。

ア アララギ派を代表とする歌人で、主な歌集に「死にたまふ母」が収められた『赤光』や『あらたま』などがある。

イ 明星派の詩人から出発した歌人で、主な歌集に『一握の砂』や『悲しき玩具』などがあるが、貧乏な生活に苦しんだ。

ウ 詩・小説・戯曲などさまざまな分野で活躍した歌人で、主な歌集に『みだれ髪』や長詩「君死にたまふこと勿れ」などがある。

エ 終生旅と酒を愛し、旅を中心とした自然や日常生活の感情を歌った作品が多く、主な歌集に『海の声』や『別離』などがある。

オ 短歌と俳句の革新運動を推進した歌人・俳人で、歌論「歌よみに与ふる書」があるが、晩年は病床につくことが多かった。

〔三〕 次の文章の筆者はアメリカ生まれの作家です。日本に住み日本語で創作活動が続けています。これを読んであとの問いに答えなさい。

新宿の路地裏にある木造家屋の、その二階の和室で、ぼくは日本語の原稿を書いている。「原稿」は、文字通り、四百字詰め の原稿用紙に手書きである。一千年あまり続いた伝統の、最後の世代の、たぶん最後の作家の一人となった。漢字と、二種類の仮名と、ときにはローマ字も交えながら自分の手で縦文字をつづる。そのことにこだわるのは、ぼくが外からこの島国の表現の言葉へ入り込んできたからかもしれない。

和室に座り、原稿用紙のマスに一字一字を書き込む。〔A〕、その作業によって決して「伝統」を求めているわけではない。むしろ縦文字を通して世界の「今」はどのように浮かび上がるのか、それが面白い。政治学者でも経済学者でもなく、日本文学の翻訳家から日本文学の創作者への道をたどってきたぼくは、どんな国の出来事についても、日本語で表せばどうなるのか、と考えるようになった。

薄い木造の壁を通して、さまざまなことばが聞こえてくる。日本的な空間、だからこそ開かれている。石造りの家なら、世界はこのようにたやすく浸透して来ないだろう。実際の声と、記憶と連想の声、日本語の声、英語や中国語の声も、ここにいれば耳にとどく。旅に出かけて、もどつてくると、旅先で聞いた声音と、目に入った異質な文字がよみがえ甦り、いつかは日本語の原稿となる。

① 世界を、「和訳」するように日本語で書くと、その世界はいつも新しく見えるのである。

新宿の路地の奥にある古い木造のぼくの住居に、実に久しぶりに白人の客が見えた。

白人といっても、ぼくと似た人生で、芯まで日本語の感性に染まったアメリカの若い日本文学研究家であった。〈中略〉その人は、ぼくがはじめて日本語で書いた『星条旗の聞こえない部屋』を英訳することになった。母語ではない日本語でつづった小説が、母語に翻訳される。外から日本語に入よそって書いた、その作品が、また外の言葉で像を結ぶ。この時

代ならではの、表現の運命を感じた。

若き西洋人が多くの小説を開き、ある個所を指した。そして突然、「これは単数ですか、複数ですか」と聞きだした。自分が書いた日本語を、何度も読みかえしてみた。そして「分からない」と答えた。

ぼくが若い頃、逆の立場で、翻訳家としてある日本人の作家に同じ質問をしたことがあった。相手に、「分からない。われわれ日本人にはそんな区別がない。英雄君が自分で決めなさい」と言われて、困ったことを思いだした。相手は、最も「国際的」な作家、安部公房あべこうぼうだったのである。

一つも、二つも、ない。a も the もない。ときには主語すらない。I も you も they もいない。あるいはみんながいる。

②日本語の「限界」は、実は英語にはない可能性でもある、と新宿の路地の奥で、考えさせられた。

今年正月のテレビ番組のために、去年暮れにぼくは旅に出かけた。近年、小説を書くために中国へ渡りつづけてきたぼくにとって、それは久しぶりの日本国内の旅だった。「日めくり万葉集」という番組で、場所は日本文化の第一黄金期の京みやこであった奈良と、日本文学誕生の地となった明日香村であった。

一つの国からもう一つの国へ移動すると、おのずと異言語に触れ、異質な音声や文字を体験する。それが現代の人が味わえる言葉の大きな愉楽である。現代の日本の都市から、七世紀と八世紀に栄えた文化の場所へ旅すると、外国語でなく古代の日本語という③「もう一つの表現の言葉」に身をさらすことになる。『万葉集』に収められている千三百年前の日本語を思い出しながらその風景の中で動く。どこを歩いても自分が「詠まれた自然」の中にいる。風景のいたるところに、詠まれたから伝統的になった地名がある。

取材の最後の日の夕方、若草山の頂上にたどりついた。たそがれの光に包まれた山の尾根が幾重にも連なり、尾根の上を歩く人びとの小さな姿も見分けられた。^{*1}「万里の長城みたいだ」とぼくは思わず言った。建造物ではなく、「文明」の遺跡でもなく、山の形そのものが壮大なのだ。

中国大陆で見た石の宮殿やレンガの城壁の記憶が薄れて、山と、河と、また山を、あきもせず表した奈良時代の島国の言葉が、もう一つの現代語のように、新しく、頭に響いたのであった。

日本の作家になる前、ぼくはアメリカで日本文学を研究していた。プリンストン大学の図書館にこもり、『万葉集』を英訳し、和歌から滲む大和の風景をよく想像した。

二〇一〇年は平城遷都千三百年紀にあたり、その前後から、『万葉集』について話をするのがふえた。特に鮮烈な印象を与えた一首の名歌を、ぼくは必ず取り上げる。

「あをによし」の B を冠した、「奈良の京は みやこ 咲く花の にほふがごとく 今盛りなり」という日本語をはじめ読んでんだときの感慨は、今でも忘れられない。千三百年前の日本人の感情が、ほとんど同時代のような新鮮さで、伝わった。自分の都市、自分の文化の美しさを主張している。なのに、近代のナショナリズムにつきものの暗さはなく、誰かを排他している雰囲気はまったくない。

正倉院にはペルシャの工芸品もあり、『万葉集』の歌人の中にはアジアから移住した人たちもいた。日本の歴史ではじめて栄えた「国際都市」を思い浮かべながら、ニュージャージー州にいたぼくは、「The capital at Nara flourishes now」とためらいもなく英訳することもできた。

近代国家とは違う、おおらかな文化意識を語った声が、二十一世紀に聞こえてくる。 C 異文化にまで、そのことが伝わる。

「奈良の京」を英訳してみると、逆に一つの「日本語の奇跡」に触れた、という気がしたのであった。

外観が物々しく、中はどこか無機質な、北京空港ペキンの新しいターミナルで、ぼくは東京行きの飛行機を待っていた。出発が遅れるというアナウンスが聞こえ、そのことを、中国語で、隣の女性に尋ねた。女性も中国語で答えた。話してい

るうちに、相手は韓国人だと分かった。話が弾み、出発までの一時間近く、会話をし続けた。

飛行機に乗って一人で考えたとき、外国人同士で何のためらいもなく中国語で話したのだ、と不思議な気持ちになった。そして思い出すと、以前もモンゴル系やイスラム系の中国人とはもちろんのこと、確かに南米人ともイラン人とも、そうすることが当たり前のように、中国語で話した。今まで日本人とイタリア人、タイ人とドイツ人が、共通語として英語で話してきたように、中国語がもう一つの「国際語」になってしまった。その「当然さ」にばかりは驚いた。

最近の話題作『日本語が亡びるとき』の中で、水村美苗^{みなえ}さんは、各言語には本来それぞれの「真実」があるのに英語だけの「真実」が世界を支配する時代の、日本語の運命を憂えている。中国では、ぼくはほとんど無意識に中国語の「宇宙」に参加をして、その「真実」を共有した。中国語ではなく日本語に人生をかけたぼくは、北京から東京へ帰って、^④日本語の「真実」が、あのように共有されるようになってほしかったのに、という思いも禁じ得ない。

ぼくが日本の中で特にインスピレーションを感じる場所は、津軽半島である。アメリカや中国と違って誰も「広大な」とは言わない日本列島の、しかし東京から列車で行くとほとんど「大陸的」な距離感を覚えさせるのは、津軽への旅である。津軽は太宰治^{だざいおさむ}ゆかりの地で、他の愛読者と同じく文庫本を手に金木^{かなぎ}や小泊^{こどまり}や竜飛^{たつび}へ足を延ばし、太宰が書いた風景を歩く。

他の多くの近代文学の遺跡の地と違って、津軽に不思議な引力を感じるのは、地元の人同士が話す言葉が分らないからである。方言という、ほとんど不透明な言葉のもやが、同じ島国の中にあつた文化の歴史的な密度を想像させてくれる。そして「分かなさ」の一因として、その一部の単語がアイヌ語に由来している、という学説を知ったとき、国内の「異文化」の痕跡が現代に生きている人たちの声音となつてぼくの耳に響いているのだ、ということも分かった。

近代国家が作り上げた「国語」の権威の前で、方言は恥ずかしいものと思われた。だが方言は本来、分かなければ分らないほど、他者の言語感覚を伝えるものであり、その多様性も美しい。^⑤面積^⑤だけでは測れない「広さ」が、むしろ

音を通して浮かび上がる。

最近是中国大陸に旅をし、省^{*2}ごとになる方言を聞き、その言葉を日本語の小説でつづる。大陸の方言に聞き入るほどの耳は、実はその前に、津軽で鍛えられたのである。

(リービ英雄^{ひでお}『バイリンガル・エキサイトメント』による)

〔注〕 *1 万里の長城……中国にある城壁の遺跡。

*2 省……中国の行政区分。

問一 A・C に当てはまる最も適切な語を次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし同じものは二度使えません。

は二度使えません。

ア なぜなら イ つまり ウ そして エ しかし オ たとえば カ だから

問二 B には「あをによし」のような「和歌の表現技法」を表す言葉が入ります。その言葉を漢字で書きなさい。

問三 線①「世界を、『和訳』するように日本語で書く」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 旅で経験したさまざまなできごとを原稿用紙に日本語で書き込むということ。

イ 英語や中国語など外国語で書かれた世界を日本語に翻訳して表現するということ。

ウ 日本の伝統的な考え方をもとにして世界を日本特有の文化におきかえ表現するということ。

エ 外国の複雑なできごとを日本語を用いてよりわかりやすく説明すること。

オ 日本的な空間に自らをおき世界の今を日本語を用いて表現すること。

問四 — 線②「日本語の『限界』」は、実は英語にはない可能性でもある」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本語には国際的な作家でもわからない独特の表現方法があり、表現には限界があるということ。

イ 日本語固有の表現技法をうまく使えば、英語が描く世界を越えることができるということ。

ウ 英語に翻訳することができない日本語の特徴こそが、日本語のすぐれた表現方法だということ。

エ 言語にはそれぞれの特徴があり、日本語では英語とは異なる世界が見えてくるということ。

オ 日本語で表現できないことは、実は英語でも表現できないのではないかということ。

問五 — 線③「『もう一つの表現の言葉』に身をさらす」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 現代とは異なった千三百年前の日本語を、自然と思い出すようになるということ。

イ 古代の日本語を思い出しながら、その言葉で詠まれた自然の中に自らをおくということ。

ウ 伝統的な地名を追うことによって、古代の日本語を理解することができるということ。

エ 海外旅行をしなくても、国内で異質な言語の世界を体験できるということ。

オ 古代の日本語のおかげで、中国大陸での経験よりも奈良の経験の方が強く印象に残るということ。

問六 — 線④「日本語の『真実』」が、あのように共有されるようになってほしかった」とありますが、筆者は具体的にどのようなことを望んでいましたか。三十文字以内で説明しなさい。

問七 — 線⑤「面積だけでは測れない『広さ』」が、むしろ音を通して浮かび上がる」とありますが、これはどういうことですか。三十文字以上四十文字以内で説明しなさい。

問八 本文の内容に当てはまるものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本語で描くか英語で描くかによって見えてくる世界は大きく違ってくるが、その違いを恐れることなくさまざまな言語で表現することが作家に求められているのである。

イ 手書きで原稿用紙を埋めていくという作業は時代遅れかもしれないが、その行為を通して日本語の持つ美しさや表現の豊かさを再認識できるのであり、むしろ大切な作業である。

ウ 万葉集の翻訳によって千三百年前の日本人の感情がほとんど同時代のような新鮮さで伝わったように、古代の日本語を理解することが日本の歴史の理解や分析のためには重要なことである。

エ 『万葉集』の「あをによし」で始まる和歌からは、奈良の文化の美しさを主張しているにもかかわらず誰かを排除することもなく、むしろおおらかな文化意識を語っていることが伝わってくる。

オ 地元の人同士が話す言葉がわからず苦労しても、方言のおかげで不透明な言葉のもやや文化の歴史的な密度を想像することができるので、方言を守ることがはきわめて重要なことである。

四 次の古文を読んであとの問いに答えなさい。

齋藤左衛門の尉助康、丹波の国へ下向したりけるに、狩りをして日暮れたりけるに、古き堂^Aのありけるにうち入りて、夜をあかさんとしけるを、その辺の子細知りたる者、この堂には人とりするもの^Bの侍るに、さうなく御とどまりはいかが^{*2}」^①と言ひけるを、「何事^②のあらんぞ」とて、なほとどまりぬ。

雪降り風吹きて、聞きつるにあはせて、世の中^{*3}けむつかしくおぼえて、正面の間に柱によりかかりてゐたりけるに、庭のかたより、もの^Cの競^きひきたるやうにしければ、明障子^{あかりしやうじ}^Dのやぶれよりきと見れば、庭には雪降りてしらみわたりたるに、堂の軒^Eとひとしき法師^Fの、くろぐろとして見えけり。さりながらさだかには見えず。さるほどに、明障子のやれ^{*5}より、毛むくむくとおひたるほそかひなをさし入れて、助康が顔をなでくだしけり。その折、きと居直れば、ひき入れけり。その後、明障子のかたにむかひて、かたまりに寝て待つほどに、またさきのごとく手を入れてなでける手をむずと^③取りてけり。取られて引き返しけれども、もとよりすくやかなる者なれば、強く取りてはなたず。しばし取り^{*8}からかひけるほどに、明障子ひき放ちて、広庇^{ひろびさし}^{*9}へ出^いでぬ。障子^Gを中に隔てて、上に乗り^Hゐにけり。軒と等しう見えつれど、障子の下になりては、むげ^{*10}に小さし。手もまた細くなり^Iにければ、いとどかつに乗りてへし伏せてをるに、細声を出だして、ききと泣きけり。その時、下人^{*12}を呼びて、火を打たせてともして見れば、古狸^{ふるだぬき}なりけり。「あした村人に見せむ」とて、下人にあづけたりけるを、下人ども、い^④ふかひなく焼き食らひてけり。次の日、

起きて尋ねければ、頭ばかりを残したりけり。正体なくて、その頭をぞ村人に見せける。その後は、長くこの堂に人とりすることなかりけり。

（『古今著聞集』による）

〔注〕

- * 1 人とり……人を襲つて取り殺す。
- * 2 さうなく……用心もなく気安く。
- * 3 けむつかしく……なんともいえないような気味の悪い感じになつて。
- * 4 きと……すばやく。
- * 5 やれ……破れ目。
- * 6 ほそかひな……細腕。
- * 7 かたまりに……からだをまるめて。
- * 8 取りからかひけるほどに……手をつかんだまま争いあつていたが。
- * 9 広庇……寝殿造りで庇の外側の一段低い板張りの吹きぬけの部分。
- * 10 むげに……ずいぶんと。
- * 11 いとど……いよいよ。
- * 12 下人……召し使い。しもべ。

問一 ―― 線 A～E「の」の意味が他と異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問二 ―― 線①「と言ひけるを」とありますが、直前の「」の記号で終わるこのせりふのはじめには「」の記号は付いていません。このせりふのはじめはどこからですか。本文中から三字でさがし、抜き出して書きなさい。

問三 ―― 線②「何事のあらんぞ」とありますが、この言葉には助康のどのような気持ちがこめられていますか。その説明として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア どういうことが起きたのかと不思議がる気持ち。

イ 何が起きるのだろうかと不安に思う気持ち。

ウ あとに引けなくなつて困っている気持ち。

エ たいしたことはないという大胆な気持ち。

オ どうせわかるまいとあきらめている気持ち。

問四 — 線③「取りてけり」の主語を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 助康 イ 子細知りたる者 ウ 人とりするもの エ 下人ども オ 村人

問五 — 線④「いふかひなく焼き食らひてけり」の現代語訳として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いくらいつても聞かず焼いてしまった。

イ なさけないことに焼き殺してしまった。

ウ すっかり怖くなつて焼いて逃げてしまった。

エ どうしようもないことに焼いて食べてしまった。

オ しかたがなかったので焼いてくだいてしまった。

問六 本文の内容に当てはまらないものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 助康は狩りをしていて日が暮れてしまったので、古いお堂で夜を明かすことにした。

イ 助康がお堂に泊まった夜は、雪が降り風が吹いていて気味の悪い感じになっていた。

ウ 夜になると、法師は古狸を使ってお堂を訪れる人を襲っていた。

エ 助康を襲ったものは、最初は大きく見えたが実際には小さかった。

オ 古狸の頭を見た村人たちは、人を襲ったものの正体がわかって助康に感謝した。

〔五〕 次の各問いに答えなさい。

問一 「あまり小さなことにはこだわらない方が、気が楽だと思う」の「小さな」の品詞名を漢字で書きなさい。

問二 次の――線の動詞の活用の種類をあとからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。またそれぞれの活用形も漢字で書きなさい。

- (1) 不純なものをのぞいて実験に取りかかる。
- (2) 雑草が生えてくるのを防げないので困っている。

ア 五段活用 イ 上一段活用 ウ 下一段活用 エ カ行変格活用 オ サ行変格活用

問三 次の――線の「よく」はどの言葉にかかりますか。その言葉を一文節で抜き出して書きなさい。

よく書や水墨画は塗り重ねができない、一線一点がきまりとなるから、真剣勝負でむずかしいといわれるがそれも真実である。

問四 次の――線の「に」と文法的な働きが同じものをあとから一つ選び、記号で答えなさい。

薬を飲んだからといってただちに効き目があるかどうかはわからない。

ア 静かに夜がふけてゆく。

イ 疲れているのに眠れない。

ウ ときは夢のように過ぎていった。

エ さらに上へ上へと登った。

オ どこに着いたかわからない。

問五 次の一文中に自立語はいくつありますか。漢数字(一、二、……)で答えなさい。

思ったよりも暑くなかったので郊外に住む友人の家に出かけた。

学 年		受験番号				
中 2						
氏 名	フリガナ					
	漢 字					